

愚者の自覚——学者とは何か

坂 部 明

序

本稿は、東西における哲人たちの思索の原点に、自己を厳しく見すえたことにより、自己において、また人間において愚者としての自覚あることを論ずるものである。

そしてそのことにより、世間において学者と呼ばれ得る人は、いかなる特徴を有しているかを論ずるものである。

そもそも、西周が『百一新論』(1874刊)において訳出した「哲学」の原語 *philosophia* (*philosophy*, *Philosophie*, *philosophie*)の語義は、「智慧(*sophia*)を愛し求める(*philein*)こと」として知られているが、その探究の出発点は、自らにおいて「智慧」の無いことの自覚であり、それがあって始めて「智慧を愛し求めること」が可能となる。この場合、「智慧」とは単なる知識の蓄積ではない。それは、生と死を明らめる「根源的叡智」と言ってよいであろう。それはギリシアにおいては《ソ피아》(*sophia*)として、またインドにおいては《ブラジュニャー》(*prajñā*)の語で表わされた⁽¹⁾。

そして、「智慧を愛し求めること」の出発点は、東洋においては「愚者の自覚」として、また西洋においては「無知の自覚」として現われているように思われる。

本稿は、東洋においては初期仏教における「愚者観」と日本仏教における祖師たちの「愚者観、及び愚者としての自覚」を、また西洋においてはソクラテス、及びアウグスティヌスにおける「無知の自覚」及び「愚者の自覚」を題材とするものである。

一 初期仏教における愚者の自覚

愚者(*balaka*)とは、次のように定義される。

「愚者にして(己れ)愚なりと想ふは已に賢なり、愚にして(己れ)賢なりと想ふ人こそ實に愚と謂はる⁽²⁾。」

南伝パーリ語による和訳は次のようになる。(以下同じ)

「もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者と思う者こそ「愚者」だと言われる⁽³⁾。」

人は生まれながらにして賢者であるのではない。基本的には愚そのものの状態から出発し、成長して学び、知識を得て、「よく念ひて聖となる⁽⁴⁾。」と言うべきであろう。困難なことではあるが、真理・真実とは何かについて、普遍妥当性をもって思索することが重要なのであって、知識があることによってのみ賢者なのではなく、いわんや聖者なのでもない。言ってみれば、「賢者には、賢者なりという想いが無いからこそ賢者」なのであろう。

「愚者」と定義されることの他の側面では、その特徴が次のように表現される。

「我が子なり、我が財なり」と思惟して凡愚は苦しみ悩む、我の我已にあることなし、誰の子ぞ誰の財ぞ⁽⁶⁾。」

南伝パーリ語和訳

「《わたしには子がある。わたしには財がある》と思って愚かな者は悩む。しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか⁽⁶⁾。」

これは「私のもの」(我所 attaniya) という思いは凡夫につきまとう。その思いの第一は、命を支える身体そのものであり、二次的に自己の所有になる、あるいは所属すると思われるもの(家族、財産、地位、名誉など)に及ぶ。しかし、よくよく考えてみれば、自己の身体そのもののさえ、自己の思うようにはならない。無常なる身体は、やがて破壊されてしまうものである。それなのに、それらは永遠に変わらないものと錯覚する。そこにおいて、愚者の愚者たる所以がある。

出家者たちにおける愚者の有様は、また次のように言われる。

「虚しき尊敬を望む人多し、比丘衆の中にては先にせられんことを(望み)、住處の中には主權を(望み)、他家の中には供養せられんことを(望む)⁽⁷⁾。」

南伝パーリ語和訳

「愚かな者は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らの間では上位を得ようとし、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行っては供養を願うであろう⁽⁸⁾。」

上記のことばは、何も出家修行者に限らない。現代社会における組織において、「修行僧ら」、「僧房」と「他人の家」という単語を他のことばに入れ替えてみれば、おのずと通ずるものがある。

このような「尊敬」、「上位」、「権勢」、「供養」(現代語では接待か)を得ようと願うことは虚しいことなのである。

ゴータマ・ブッダが仏弟子たちに教え諭したのは、そのような心に向うのではなく、《安らぎ》(nibbāna ^{ねはん} 涅槃⁽⁹⁾)に至る道の探究であった。

「一は利養の道、一は涅槃の道、斯く通達する佛陀の弟子なる比丘は、名聞を好むべからず、益々遠離に住すべし⁽¹⁰⁾。」

南伝パーリ語和訳

「一つは利得に達する道であり、他の一つは安らぎにいたる道である。ブッダの弟子である修行僧はこのことわりを知って、榮譽を喜ぶな。孤独の境地にはげめ⁽¹¹⁾。」

ゴータマ・ブッダは仏弟子たちに、安らぎにいたる道を生涯説き続けた。そのわけは、「涅槃にまさる楽しみ(sukhha)は存在しない」(Dhp. 202)からであり、それは人々への幸福を願うゴータマ・ブッダ⁽¹²⁾の慈悲心の現われであると考えられる。仏教でいう幸福とは涅槃の境地に達することに他ならない。

愚者の行ないはまた悪事と結びつく。

「罪過の未だ熟せざる間は愚者は以て蜜の如しと爲す。罪過の正に熟する時に至りて(愚者は)苦惱す⁽¹³⁾。」

南伝パーリ語和訳

「愚かなる者は、悪いことを行っても、その報いの現われないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかしその罪の報いの現われたときには、苦悩を受ける⁽¹⁴⁾。」

ここでは、善悪の行為（karman 業）がやがて結果となって現われるというインド的思惟を仏教も継承しているのが見て取れる。だから、悪事を為してはならないというインド的思惟における倫理の根拠がここにある。

業はすぐには現われず、時がたち、一定の時期が来ると、行為主体がその果を受ける。

「造られたる悪業は猶ほ新たに搾れる牛乳の如し、（即時に）熟し了はらず、随逐して愚者を悩ます、猶ほ灰に覆はれたる火の如し⁽¹⁵⁾。」

南伝パーリ語和訳

「悪事をして、その業（カルマ）は、しばらく立ての牛乳のように、すぐに固まることはない。（徐々に固まって熟する。）その業は、灰に覆われた火のように、（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につきまとう⁽¹⁶⁾。」

ところで、初期仏教における悪と善の原初的な概念は次のようなものである。

悪の概念

「造り^{むね}已りて後悔し、顔に涙を流し、泣きて其果報を受くべき業は、善く作られたるに非ず⁽¹⁷⁾。」

南伝パーリ語和訳

「もしも或る行為をしたのちに、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない⁽¹⁸⁾。」

善の概念

「造り已りて後悔せず、死して後^{よろこ}悦びて其果報を受くべき業は、善く作られたるなり⁽¹⁹⁾。」

南伝パーリ語和訳

「もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い⁽²⁰⁾。」

後代の仏教学者たちは、悪しき行ないを「十悪」という形にまとめあげた。これらは次の十種の悪である。

(1)生きものを殺すこと（殺生）、(2)盗みをはたらくこと——与えられないものを取る（偷盗）、(3)男女間のみだらな行ない。夫または妻以外の男、または女と性関係をもつこと（邪淫）、(4)うそをつくこと（妄語）、(5)他人をそしり、人の間をさく言葉を言うこと（両舌）、(6)粗暴で、荒々しい言葉を発すること（悪口）、(7)言葉を飾るざれごと、駄じゃれなど（綺語）、(8)貪ぼり求めること（貪）、(9)怒り（瞋）、(10)誤った見解（悪見）。

これら10種の悪のうち、(1)～(3)までは、身体による悪行、(4)～(7)は言葉による悪行、(8)～(10)は意（manas）による悪行をいう。

これらの悪に対し、十善はそれらをしない（不——）という形で表現される。

ところで、愚者は、このような悪を犯す傾向があるし、また犯すというのである。しかし、よくよく考えてみるならば、十悪の一つでも決して一度も犯したことの無い人間などという者が存在するだろうか。そのような意味において、人間は愚者が基本であるとは言えまいか。

二 日本仏教における愚者の自覚

(1) 聖徳太子(572~622)における凡夫^{ぼんぶ}の自覚

日本仏教における愚者の自覚を考慮する時、まず第一に挙げられるのは、聖徳太子の『十七条憲法』である。

聖徳太子は用明天皇の第二皇子と生まれ、当時の政争の中で女帝推古天皇が即位をした時に摂政となり、実際上の統治者となった。伝記によれば、天資聡明であり、広く儒学・仏教のほか、暦学・天文・地理などを学び、留学生を隋に派遣して大陸文化の輸入に努めたという。仏教には殊の外精通し、『法華経』、『維摩経』、『勝鬘経』の三経を自ら講義したという。このような仏教学の素養の中から生まれたのが、国家の官吏の遵守すべき心構えを説く『十七条憲法』である。これは太子が仏教を政治理念の基調に置くことにより、物部、蘇我氏を始めとする諸部族間の対立を緩和し、宥和して官吏を含む民衆の倫理性の高揚に努めようとした現われである。

さて、この『十七条憲法』において、太子の人間観を如実に物語るものは、第十条においてである。そこにおいて、太子は「人間とは、《相共に賢^{さか}しく、愚なる凡夫》としての存在」と見ていたことが理解される。

「凡夫」(prthag-jana 異生)とは、苦・集・滅・道という四諦^{しかい}(4つの真理)を理解していない凡庸浅識の者の意で、《愚かもの》の意にも用いられる⁽²¹⁾。真理を知らないために、天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄の六道に輪廻転生する存在でもある。仏教では、神々も地獄の衆生も寿命尽きれば輪廻転生する愚かな凡夫として同一線上に並ぶ存在であると見る。

『十七条憲法』の第十条において、太子は次のように言う。

原文「十(に)曰(く)、^(コ、ロノイカリ)忿^(オモヘリノイカリ)を絶(ち)、^{たが}瞋^(ヨ)を棄(て)て、人^{たが}の凌^(コトワリ)(ふ)を怒(ら)^ぎ不^(アシ)レ。人皆心有(り)。各^(心)(く)執^{あし}しること有(り)。彼^(ヨ)是^(ヨ)ムズレば[則]我^{きか}は非^(アシ)ムず。我^{おろか}是^(アシ)(むずれ)ば[則]彼^(タマヒト)は非^(ア)(む)ず。我^{のみ}必^(ヨ)(ず)聖^(ア)(しき)に非^(コトワリ)(ず)。彼^{たれ}必^(ア)(ず)愚^(ミ、カネ)(に)非^な(ず)。共^{さか}に是^(ア)(れ)、凡^(オコナ)夫^(オコナ)(ならく)耳。是^(ア)ク非^(ア)シキ[之]理^(オコナ)、詎^(オコナ)か能^(オコナ)(く)定^(オコナ)(む)可^(オコナ)(け)む。相共に賢^(オコナ)(しく)愚^(オコナ)(なる)こと、^(オコナ)鑊^(オコナ)の端^(オコナ)无^(オコナ)(き)が如^(オコナ)(し)。是^(オコナ)(を)以^(オコナ)(て)彼^(オコナ)(の)人^(オコナ)瞋^(オコナ)(ると)雖^(オコナ)(も)、還^(オコナ)(り)て我^(オコナ)が失^(オコナ)を恐^(オコナ)(り)よ。我^(オコナ)獨^(オコナ)(り)得^(オコナ)たりと雖^(オコナ)(も)、衆^(オコナ)に従^(オコナ)(ひ)て同^(オコナ)(じく)舉^(オコナ)へ⁽²²⁾。」

現代語訳

「第十条

心の中で恨みに思うな。目に^{かど}角を立てて怒るな。他人が自分にさからったからとて激怒せぬようにせよ。人にはみなそれぞれ思うところがあり、その心は自分のことを正しいと考える執着がある。他人が正しいと考えることを自分はまちがっていると考え、自分が正しいと考えることを他人はまちがっていると考える。しかし自分がかならずしも聖人なのではなく、また他人がかならずしも愚者なのでもない。両方ともに凡夫にすぎないのである。正しいとか、まちがっているとかいう道理を、どうして定められようか。おたがいに賢者であったり

愚者であったりすることは、ちょうどみみがね<鑲>のどこが初めてどこが終りだか、端のないようなものである。それゆえに、他人が自分に対して怒ることがあっても、むしろ自分に過失がなかったかどうかを反省せよ。また自分の考えが道理にあっていると思っても、多くの人の意見と意見を尊重して同じように行動せよ⁽²²⁾。」

人間は自我に対する執着から、自己の見解を正しく、間違っていないとする見解を生じ易く、他者の見解と対立することが往々にしてある。これは対立するという意味において、その見解が共に絶対のものとは言えない。その有様を見て、太子は「人間は共に凡夫である」と指摘するのである。

また後段の「我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ。」の部分は、人間が凡夫であることを自覚した後に、自ずと現われ出る行動なのであろう。これは「和光同塵」の生き方を想起させて興味深い。

(2) 最澄(766～822)における愚の自覚

日本天台宗の祖・伝教大師最澄は、延暦4(785)年4月6日、当時の教団のしきたりに従って南都に赴き東大寺の戒壇に進んで僧戒を受けた。時に最澄は20歳であったという。それなのに、なぜかその年の7月中旬、比叡山に登り、樹下石上の禅行生活に入った。次に取り上げる「願文」は、最澄が入山後まもなく「坐禅の際に」(伝)作ったものといわれ、全文僅か550字程の小品であるが、前文五条の誓願、結文の三つの部分から成りたっている⁽²⁴⁾。

この「願文」には、最澄の透徹した自己省察が現われている。以下本論の主題とする「愚者の自覚」に係る部分を抜粋して考察したい。

最澄の「願文」

「伏して己が行迹を尋ね思ふに、無戒にして竊かに四事の勞りを受け、愚癡にしてまた四生の怨と成る。この故に、未曾有因縁経に云く、施す者は天に生れ、受くる者は獄に入ると。提韋女人の四事の供は末利夫人の福と表はれ、貧著利養の五衆の果は石女担擧と顯はる。明らかなるかな善惡の因果。誰の有慚の人か、この典を信ぜざらんや。然れば則ち、善因を知りて而も苦果を畏れざるを、釈尊は闡提と遮したまひ、人身を得て従に善業を作さざるを、聖教に空手と噴めたまへり。

ここにおいて、愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄、上は諸仏に違し、中は皇法に背き、下は孝礼を闕けり。謹んで迷狂の心に随ひて三二の願を發す。無所得を以て方便となし、無上第一義のために金剛不壞不退の心願を發す⁽²⁵⁾。」

現代語訳

「伏して自分自身の行ないを尋ねて考えてみるに、戒を守ることなくして、ひそかに衣服・飲食・臥具・湯薬など他人の骨折りを受けており、愚にして真実を知らずに、あらゆる生きものの怨となっている。このために、『未曾有因縁経』には、「施す者は天に生まれ、施しを受ける者は地獄に入る」と述べている。前世において婆羅門や五人の比丘に欺かれても衣服・飲食・臥具・湯薬の供養を行なった提韋は、この世では舍衛国の波斯匿王の皇后となるという福を得て行ないの結果が現われ、その利益を貪った五人の比丘は、この世に不妊の女となって生まれ、皇后の興をかつぐ結果となって現われている。善惡の因果は明らかなこと

であるよ。^{ざんき}慚愧の心をもつ人ならば、誰がこの法則を信じないであろうか。このようであるので、善い原因を知りながら、しかも苦悩の結果を畏れない者を、釈尊は仏になる種を全く持たない者として排除されており、人の身を得ながら、無意味に善い業をなさないでいる者を、^{しょうぎょう}聖教には、宝の山に入りながら空の手で帰る者であると責めている。

ここにおいて、愚の中の極愚であり、狂っている中の極狂であり、心の荒れたつまらない人間であり、最低である最澄は、上は仏たちの教えに違反し、中は天子の法に背き、下は孝を欠いている者である⁽²⁶⁾。」

以上から明らかなように、最澄は自らを、「愚が中の極愚、^{おう}狂が中の極狂⁽²⁷⁾底下^{ていげ}の最澄」と呼んでいる。

「愚」とは、認識される対象について迷うこと、またその主体を総称する⁽²⁸⁾。「狂」とは文字通りの意味であり、最澄は自らを「最も狂っている自分」と呼んでいるのである。なお、「ばか者」の意味で「狂愚」という用語もある⁽²⁹⁾。

なお、「上は諸仏に違し、中は皇法に背き、下は孝礼を闕けり。」の段において、最澄の「^く求法」という出世間の真理に対する信、「皇法」という世俗的ではあるが、天皇に対する畏敬の念、「孝礼」という儒教的倫理の遵守が読み取れる。

また、前段においては、自らを「無戒」と呼んでいるのは、出家者たる比丘が守るべき250戒を守りきれない者という意味であり、最澄の深い自己洞察から来るものであろう。さらにまた、「愚癡」（迷妄）なる者とも言っている。

(3) 空海（773～835）における愚の自覚

真言宗の祖・弘法大師空海は、天長7（830）年に^{じゆんな}淳和天皇の各宗の宗旨を提出するようにとの詔勅に応じ、真言宗の宗旨として『秘密曼荼羅十住心論』（『十住心論』と略称）と、その要略である『秘蔵宝鑰』3巻⁽³⁰⁾を提出する。南都からは、法相・三論・律・華嚴の各宗が、また天台宗がこれに応じ、それぞれの宗旨を提出した。

『十住心論』は空海晩年の主著であり、空海の思想がこれに凝縮されているといっても過言ではない。

ここでは、「人間の愚」についての空海の見解が述べられている『秘蔵宝鑰』の序により、これを考察したい。

『^ひ秘^{ぞう}蔵^{ほう}宝^{やく}鑰』

巻上 序あわせたり

沙門遍照金剛の撰

（大意序）^{ゆうゆう}悠悠たり、悠悠たり、^{はなは}太だ悠悠たり、
内外の^{けんしやう}縑紉千万の軸あり。
^{ようよう}杳杳たり、杳杳たり、甚だ杳杳たり、
道をいい、道をいうに、百種の道あり。
^た書死え^た諷死えなましかば、もと^{いかん}何がせん。
知らじ知らじ、われも知らじ、

思い思い思うとも、聖も心ることなけん。
 牛頭草^{なづ}を嘗^{あや}めて、病者を悲しみ、
 断菴車^{あやつ}を機^{あわ}つて迷方を慄^{あわ}む。
 三界の狂人は狂せることを知らず、
 四生の盲者は盲なることを識^{きと}らず。
 生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く、
 死に死に死に死んで死の終りに冥^{はじ}し^{おわ}く^{くら}し⁽³¹⁾。」

現代語訳

「悠遠である、悠遠である、まことに悠遠である。

仏教と外教の書物は数かぎりなくある。

広くしてとらえがたいのは、さまざまな教えの道である。

もしこれを書写し、諷誦することなければ、どのようにして教えの本旨を伝えようか。

もしこれがなければ、我も人も道を知らない。どんなに道を思うとも、聖人もまた思うことがむずかしい。

神農は薬を作って病者をあわれみ、周公旦は指南車をあやつって方角を示した。

欲界（食欲と性欲を有する生きものの住む世界）と色界（物質の世界）と無色界（精神のみ存する世界）の三界に住む狂人は、自分が狂っていることを知らない。

胎生・卵生・湿生・化生と生れ方を異にする真理を見ることの無い盲者たちは、自分が盲者であることを悟らない⁽³²⁾。

生れ来て、生れ来て、何度も生れ来て、生の意味がわからず、

死んで、死んで、何度となく死んでも、その死の意味がわからないのである⁽³³⁾。」

空海は、真理に到達していない命ある生きものたちを、「狂人」と呼び、また「盲者」とも呼んでいる。しかも困ったことに、彼らは自分が「狂っていること」に気がついてはいないし、「目ざめていないこと」にも気がついてはいない、と空海は言うのである。逆に考えれば、「狂っている」と気がついた時には、既に「狂ってはいない」ことになる。迷悟一如とは、このことをいう。

迷妄の最中であって、真理を悟らないが故に輪廻転生するという主旨が、「生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥し」という段に表現される。すなわち、今あるこの私の生は、真理を悟らないが故の結果である、ということになる。そして死は生の結果となる。なぜ死ぬのかと言えば、「生まれたから」であり、十二縁起説で言えば、無明^{みょう} (avidyā) がその根底にあるとする。

次に、同じく空海の著作から、『般若心経秘鍵』を取り上げる。

『般若心経秘鍵』

「(大綱序) それ仏法はるかにあらず、心中にしてすなわち近し。真如外にあらず、身を棄てていづくんか求めん。迷悟われに在れば発心すればすなわち到る。明暗他にあらざれば信修すればたちまちに證す。哀れなるかな、哀れなるかな、長眠の子。苦しいかな、痛しいかな、狂醉の人。痛狂は酔わざるを笑い、酷睡^{あどけ}は覺者を嘲る⁽³⁴⁾。(以下略)」

現代語訳

「かの仏陀の悟られた真理は遙か遠くにあるのではない。わが心の中であって、きわめて近くにある。安らぎをもたらず真理は、自らの外にあるのではない。わが身を捨ててどこにそれを求められようか。迷いといい、悟りといっても、自己の心によるのであるから、悟りを求める心をおこしさえすれば、やがて到達するのである。悟りの光明と迷妄の暗黒とは、他のところにあるのではなく、(自己にあるのであるから)、教法を信じて修行すれば、たちまちに証するのである。哀れである、哀れである、長く眠っている者よ⁽³⁵⁾。苦しいことであるよ、痛ましいことであるよ、無明という酒に酔いしれている者よ。いたく酔いしれている者は、かえって人が酔っていないことを笑い、はなはだしく睡りこけている者は、目ざめた人を嘲笑するのである⁽³⁶⁾。」

このように、空海は人間を比喻を用いて「長眠の子」^{じょうみん}、「狂酔の人」と呼んでいる。「真理に目ざめていない人」^{みまう}、「無明という酒に酔っている人」というのが、現実の人間の姿なのである。しかもそのことに気がついていないことが問題なのである。

(4) 親鸞(1173～1262)における愚の自覚

親鸞は、師・法然の専修念仏に対する南都・北嶺による非難を受けた朝廷により、師法然が四国に流罪されたことに連座し、1207(承元5)年の35歳の時に、越後の国府(上越市)に流罪となる。その後1211(建暦元)年に赦免された時、「愚禿親鸞」と自らを名乗った⁽³⁷⁾。

「愚禿」とは、自らの深い内省から現われた懺悔の称であり、「愚かな剃髪した禿頭の人」の意で、親鸞の場合、この意に加えて「非僧非俗」の意がこめられている⁽³⁸⁾。

親鸞は、前掲最澄の「願文」のことばに示唆を得て「愚禿親鸞」を名乗ったといわれている⁽³⁹⁾。この称を用いて、後年親鸞は『愚禿鈔』を著わしている。これに先立って「愚」を用いた書には、法相宗貞慶(1155～1213)の『愚迷発心集』一卷、慈円(1155～1225)の『愚管抄』7巻がある。

「愚禿」を自称することは、親鸞の深い内省から現われたもののみをみることができ、また親鸞は、命ある生きものたち(衆生)を「罪惡深重、煩惱熾盛」と評している⁽⁴⁰⁾。そして自らもまた、衆生の一員であることを親鸞は深く自覚していたのである。だからこそ「とても地獄は一定すみかぞかし⁽⁴¹⁾」という言葉が発せられたのであろう。

親鸞は『愚禿悲歎述懐』において次のように言う。

浄土真宗に帰すれども
真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身に
清浄の心もさらになし

三 西洋思想における無知の自覚

西洋においては「愚者」としての自覚が、叡智を欠いているという意味での「無知」の自覚として現われているように思われる。そこで二人の哲人を取り上げてみたい。

「無知」(Unwissenheit, Nichtwissen)とは、否定的な意味では、ある人間が全く物を知らないこと、それにもかかわらず、おこがましく判断を下すこと。肯定的な意味では、自己

の無知を知ること。この場合とくに「不知」という語を用いて区別することがある⁽⁴²⁾。

(1) ソクラテス(Sōcratēs, 470～399B. C.)における無知の自覚

インド仏教、及び日本仏教における哲人たちの立言に対応すると思われるのは、ソクラテスにおける「無知の知」と呼ばれるものである。

ソクラテスは、若い時からの友人であるカイレポンから、デルボイの神（アポロン——太陽神）の神託として、そこの巫女から、「ソクラテスより知恵のある者は誰もいない」ということを聞かされた。ソクラテスはこれを聞いて次のように考えた、「いったい何を神は言おうとしているのだろうか。いったい何の謎をかけているのだろうか」と。そして彼はさらに、「なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、知恵のある者なんかではないのだということを知覚しているから」と考えた。

そこでソクラテスは神託の真意を知ろうと次のような方法を取った。それは知恵があると思われる者を訪ねて問答をすることであった。そしてその結果判明したことは、問答する相手は、他の多くの人たちに、知恵のある人物だと思われるらしく、また特に自分自身でも、そう思いこんでいるらしいけれども、じつはそうではないのだと、ソクラテスには思われるようになった。

そこで次のような結論に達したという。

「しかしわたしは、自分ひとりになった時、こう考えたのです。この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男もわたしも、おそらく善美のことがらは、何も知らないらしいけれども、この男は知らないのに、何か知っているように思っているが、わたしは知らないから、そのとおりに、また知らないと思っている。だから、つまりこのちょっとしたことで、わたしのほうが知恵のあることになるらしい。つまりわたしは、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしい⁽⁴³⁾。」と。

そして次々と同じ方法で問答してみたが、同じ結果が得られたという。しかし、相手は自己の無知に気がつかされ、傷ついてソクラテスを憎むことになり、これが積もり積もって結局はソクラテスは告発されることになるのだが。

以上が、ソクラテスの「無知の知」といわれるものである。

無知の知は無限の謙虚に通じ、それは傲慢を排除するという。

『「無知の知」は知性を第一に実践の世界に踏入れしむるが、さらにこれは倫理の世界にまで我々を導くものとなるであろう。何故なら無知の知は我々に与ふるに無限の謙虚を以てするからである。そしてそれは実に道德的なものの最も重要な根拠であるべきであったからである。ギリシア人にとって第一の悪徳は傲慢(*v'βλις*)であった。殊に神に対するヒbrisは人間にとって致命的であったといへよう』⁽⁴⁴⁾。

(2) アウグスティヌス(Aurēlius Augustīnus 354～430)における不知(無知)の自覚

初代キリスト教会最大の教父と称され、西方ラテン・キリスト教会の代表的神学者で、正統的教理を完成したといわれるアウグスティヌスは、33歳の時に懐疑論を唱えるアカデミア派との論争の中で、自分に知恵が無いことを表明している。

「わたしは今までのわたしの考え方を要約しよう。人間的知恵がどんな状態のものであれ、

わたしがまだそれを手にしていないことをわたしは知っている。わたしは今33歳であるが、他日それを自分の手にするであろうという望みを棄てるべきではないと考えている。(望みは棄てなくても)死すべき人間が善きものとみなす知恵以外のすべてのものは、これを軽んじて、知恵を探究することにわたしは専心した。思うに、わたしはこの討論でアカデミア派の論点に対して、十分に自分を守ったのであるから、アカデミア派の人々の論拠がわたしに對して、この仕事の妨害をすることは、そう易々とはできないであろう。わたしは知恵を学ぶのに二つの強い力、すなわち権威と理性の力によって動かされているのを誰も疑わない。だが、どんな場合でもわたしはたしかにキリストの権威から決して離れない。実際、それより以上に強力な権威をわたしは見出さないのである⁽⁴⁵⁾。」

「知恵」を学ぶのには、理性と共にキリストの権威が不可欠である、と述べるアウグスティヌスは、また神は、人間の理解を越えて、「知」によってではなく、「不知」によって知られるとする⁽⁴⁶⁾。

四 結び——学者とは何か

以上、東洋及び西洋の哲人であり、かつ宗教者たち(哲学者の面が強調されるソクラテスもまた、彼自身は神秘主義的傾向があり、神々に対する畏敬の念を有していた。)が、自己を含む人間存在の愚かさ、あるいは無知について深い省察をしていたことが明らかである。そしてこの自己洞察、人間存在の洞察を真になし得た者こそが、真の智慧・叡智を求めたのではないだろうか。これは単なる知識の獲得でもなく、理性、知性によって把握されるようなものでもない。いわば、最も深い意味での理性の探究と言ってもよいであろう。

さて、ここで次に学者とは何か、について、以上の哲人たちの言葉を参照して考察してみたい。

「学者」という語に関しては、国語辞典では「学問をするすぐれた人」程度の意味しか述べられていない。しかし、世間一般の社会通念では、「学者」というのは、「大学などの高等教育機関に所属し、高度の専門的知識を有していて、「先生」と呼ばれ尊敬に値する人」とでも言ったらよいであろうか。中には自分を「何々学者」などと自称する人さえいる。これは人格はともかく、ただ学識だけに対する敬意を他者が払い、自分もまたそれを認められるべきであると考えているにすぎないのではないだろうか。しかしよく考えてみると、単なる知識を蓄積した人間が、必ずしも「叡智の人」ではない例の方がはるかに多いのではあるまいか。

本論で取り上げた哲人たちは、人類に対し、現代に至るまで影響を与え続け、人間とは何かについて語りかけている真の意味での学者と言ってもよい人々である、ということを前提として、筆者は「学者」としての必要な条件を次の3点にまとめてみたい。

およそ学問分野を大別すれば、人文・社会・自然の各分野に分類されるであろうが、以下はこれらに共通する学者としての要件となるであろうところの3点である。

1 愚者としての自覚、あるいは真理に対して無知なる者としての自覚を有する者
単なる知識は叡智とは異質のものである。真理に対して無智であることの自覚、愚者としての自覚を有することが第一である。学識あることによってこの自覚が阻害されることさえ

ある。ニコラウス・クサヌス(Nicolaus Cusānus 1401～1464)は、これを「学識ある無知」(docta ignorantia)と呼んだ。

愚者の自覚にめざめた人は、真の智慧を愛し求めることになる。そして真理に対しては謙虚になる。また、愚者の自覚を有する人の特徴は、謙虚であることである。そのわけは、自らが全体の真理について知らないことを知っているからである。それは、うわべだけ卑下して見せる謙遜とは異なる。「実るほど^{こうべ}頭を垂れる稲穂かな」とは、人口に膾炙されている。

2 本質を見抜く者であること

ギリシア哲学の出発は、アルケー(arche 本質)とは何かに対する探究であり、インド哲学では、諸現象の背後に想定されるものへの探究があった。

「本質を見抜く」ということは、諸現象の真相を把握することであり、これは(1)の条件を経過した後には生ずる叡智の働らきによる。それは、あるがままの真相を知ること他にない。知性による判断には限界がある。

3 創造性(力)を有する者であること

創造性——新しいものを作り出すことは、物まねとは異なる。海外の事物を紹介することは研究の一要素ではあるが、それだけに終ってはいは学者とは言えないのではなかろうか。そしてこの創造性は何よりも人類の幸福に寄与するものでなくてはならない。知識は^{もろは}諸刃の剣である。悪用すれば、人類を滅亡させてしまう可能性さえある。核兵器の開発などがその悪しき例であり、近くはサリン製造もまた知識の悪用であった。

従って、この創造性には人類、あるいは命ある生きものたちに対する愛と慈悲の精神が根底にあらねばならないであろう。

あ と が き

「愚者の自覚」という考察から、「学者とは何か」を考えてきたが、それでは、浅学非才なるわが身はどうかと尝试してみたとき、まことに^{じくじ}忸怩たるものがある。「研究者の端くれ」ぐらいが無難といったところであろうか。そもそも「学者」というのは、自分で決めることではないことだけは確かなように思えるのだが。

注

- (1) 「ソフィアとブラジュニャー」(『東の思想・西の思想』82頁。三修社)
- (2) 荻原雲来訳註『法句経』24頁。(岩波文庫)
- (3) 中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』19頁。(岩波文庫) Dhp.63
- (4) 聖徳太子『十七条憲法』の第七条(『聖徳太子』410頁。中央公論社)
- (5) 注(2)と同。24頁
- (6) 注(3)と同。19頁。Dhp.62
- (7) 注(2)と同。26頁。Dhp.73
- (8) 注(3)と同。20頁。
- (9) 迷いの火を吹き消した状態(中村元『佛教語大辞典』1076頁)
- (10) 注(2)と同。27頁。
- (11) 注(3)と同。20～21頁。
- (12) 「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、^{あんのん}安穩であれ、安楽であれ。」Sn.145, 中村元訳

『ブッダのことば』37頁（岩波文庫）

- (13) 注(2)と同。25頁。
- (14) 注(3)と同。19～20頁。Dhp.69
- (15) 注(2)と同。26頁。
- (16) 注(3)と同。20頁。Dhp.71
- (17) 注(2)と同。25頁。
- (18) 注(3)と同。19頁。Dhp.67
- (19) 注(2)と同。25頁。
- (20) 注(3)と同。19頁。Dhp.68
- (21) 中村元『新仏教辞典』491頁、「凡夫」（誠信書房）
- (22) 「憲法十七条」（『日本思想大系 聖徳太子集』19頁。岩波書店）
- (23) 中村元・瀧藤尊教訳「十七条憲法」（『日本の名著 聖徳太子』414頁。中央公論社）
- (24) 『日本思想大系 最澄』・解説464～465頁。（岩波書店）
- (25) 同上書。286～287頁。
- (26) 田村晃祐・福永光司訳「願文」（『日本の名著 最澄・空海』77～78頁。中央公論社）
- (27) 天台大師・智顗の『天台小止観』よりの引用という。すなわち、「智慧を学ばなければ愚といい、智慧だけを学んで禅定福德を修めなければ狂という」こと。〔注(26)と同書。307頁補注。〕
- (28) 中村元『佛教語大辞典』277頁。（東京書籍）
- (29) 同上。229頁。
- (30) この書は、『大日経』住心品の思想にもとづいて、真言行者の住心の展開の次第、言いかえれば菩提心の展開の次第を述べたものであるが、同時にまた当時の思想宗教を類型的に分類・批判し、真言宗が最もすぐれていることを述べたものである。
- (31) 勝又俊教編「秘蔵宝鑑」（『弘法大師著作全集第一巻』124～125頁。山喜房佛書林。）
- (32) これと対照的なのは、現代語訳で「目ざめた人」と訳されるブッダ（Buddha 仏陀、覚者）である。√budhは「めざめる」の意。迷妄の中にあって、そのことにめざめた時にブッダとなる。眼を開いていることによって「めざめた人」なのではない。だから「盲者」と言っているのである。なお「ブッダ」は普通名詞であり、「めざめること」は万人に可能性ありと仏教はみる。
- (33) 梅尾祥雲『現代語の十巻章と解説』（高野山出版社）と、宮坂有勝『日本の仏教 人間の種々相 秘蔵宝鑑』（筑摩書店）を参照しつつ、筆者が訳した。
- (34) 注(31)と同。108頁。
- (35) 注(32)参照。
- (36) 注(3)梅尾書を参照して筆者訳す。
- (37) 早島鏡正『教行信証入門・正信偈上』10頁（NHK 出版）
- (38) 中村元『佛教語大辞典』278頁。（東京書籍）
- (39) 『日本思想大系 最澄』465頁。（岩波書店）
- (40) 『歎異抄』（岩波文庫。41頁）
- (41) 同上。43頁。
- (42) 『哲学辞典』1372頁。（平凡社）
- (43) 田中美知太郎訳「ソクラテスの弁明」（『プラトン全集第1巻』62頁。岩波書店）
- (44) 山内得立『ギリシアの哲学 上』281頁（弘文堂書房）
- (45) 清水正照訳「アカデミア批判」第三巻二十四章四十三節（『アウグスティヌス 人類の知的遺産 15 講談社242頁）
- (46) 『哲学辞典』8頁。平凡社。